消 Volunteer 防 Firefighters 団

——町を守る大人たち——

消防団員は別の仕事をしながら、
火事や災害など、いざというときに駆け付ける
頼もしい存在です。
大きな災害時には被害が甚大になるため、
消防団が自助・共助の要となります。
今回の特集では
「自分たちの町は、自分たちの手で守る」を胸に、
日々活動を続けている消防団に注目します。
その姿を通じて、
共助の重要性や日頃の地域のつながりの大切さ、
災害への備えを考えます——

写真：消防操法大会に向けて訓練に励む消防団員

地域防災の要

消防団の今を知る

町の安全と安心を守る「内子町消防団」
災害時に共助の要として大きな力を発揮すると、その重要性が高まっています。
しかし、現実には団員の高齢化や若者の消防団離れなど、課題は山積み――
消防団の今を知り、これからを考えます。

【写真：消防団の活動】1_出初式には、小田川で一斉放水訓練を行う　2_全ての方面隊が参加する出初式の入場行進　3_水防演習。堤防を守る「木流し工」を演習する団員

我が町の消防団

消防団とは、町に住む人たちで構成される市町村の消防機関です。団員の身分は非常勤特別職の地方公務員ですが、「自分たちの地域は、自分たちの手で守る」という思いに支えられているボランティアです。

内子町消防団は現在、内子・五十崎・小田の3方面隊・13分団と女性部などで構成され、795人（28年4月1日）の団員が消火活動などのさまざまな活動を行っています。

高まる消防団の重要性

消防団は消火活動の他、災害時には救助活動や水防活動、平常時には装備の点検や防災訓練、女性部による救急救命講習や防火の啓発活動などをしています。

ここ数年、日本では地震や土砂災害、豪雨被害など、さまざまな大規模災害が発生しています。阪神・淡路大震災における救助・避難活動では、消防団をはじめとする地域の力が一番大きかったといわれています。

消防団が持つ①地域密着性（地域の事情に詳しい）、②要員動員力（全国に約86万人の団員数）③即時対応力（災害対応の技能・知識を習得している）――という特性は、災害時に大きな力を発揮すると、あらためて消防団の重要性に注目が集まっています。

山積する課題

消防団は地域の防災に欠かせない存在ですが、活動を維持するためには大きな課題があります。

一つは団員数の減少と高齢化――。町が合併した当時の団員数は911人でしたが、28年までに100人以上、減少しました。また若い団員が少なくなり、平均年齢は約42・5歳です。60歳以上の団員は25人で、団員の高齢化が進んでいます。

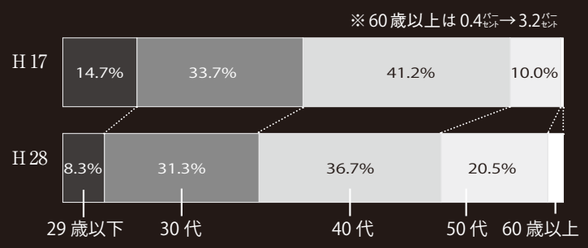
もう一つは、消防団を取り巻く社会環境の変化です。かつては自営業や農業を職業とする団員が中心でしたが、今は会社員などの被雇用者が増加。85％を占めています。町外で働く人も増え、勤務中に火災や災害が起きても職場を抜けられないという人が多い現実もあります。

内閣府が平成24年に行ったアンケートでは、消防団に「入らない」と答えた人が72・6％もいました。理由は「体力に自信がない」「高齢である」「職業と両立しそうにない」の順で多く、「職業と両立しそうにない」は29・6％を占めたそうです。

守り続けるために――

ボランティア精神で参加する団員にとって、家族や地域を守りたいという思いが活動の原動力になっています。

現状を打破するためには、家族や地域に消防団がどのような活動をしているのか、その存在の重要性を知ってもらうことが大切です。子どもたちには、地域に貢献する大人たちの生き方の素晴らしさを学んでほしいと思います。消防団自身も努力し、地域や企業の理解を進めることが、必ず消防団の未来を支えることにつながります――。



Interview

女性ならではの柔らかさで、地域の安全を守りたい

内子町消防団女性部
池田　幸江（さちえ）　部長

内子町消防団女性部は、現在17人の団員で活動しています。団員の年代は幅広く、20代から50代のいろいろな職業の人と出会え、仲間になれて楽しいです。主な活動には救急救命などの講習があります。全員が「応急手当普及員」の資格を持っていて、町内の幼稚園や老人施設などに出向きます。子どもたちには、日常に潜む危険を自分で乗り越える「リスクウォッチ」も教えています。

「何もできない」と消防団を敬遠しないで、入ってからできることを身に付けるのもいいと思います。心肺蘇生法などは繰り返し練習すれば、突然の事態にも慌てず対応できますよ。そういう人が増えれば、地域の防災力にもつながります。女性ならではの柔らかさで、地域の安全に関われることはすてきなことです。女性団員は随時募集しているので、興味がある人は内子町役場・総務課に連絡してみてください。

＼ 消防団女性部も頑張っています ／

【写真：消防団女性部の活動】1_保育園や幼稚園を訪問。リスクウォッチなどを教えている　2_心肺蘇生法の仕方を講習する　3_救急フェアで、子どもたちに優しく接する団員　4_毎年２月に行われる消防出初式に参加し、式の進行などを務める　5_防災訓練ではけが人の応急措置などに当たる

団結力が防災力

新しい消防団幹部と、消防団の技術力・団結力の源「操法訓練」を紹介します。
２年に１度開かれる「消防操法大会」に向けて、週２～３回の訓練を重ねる団員――
６月５日の予選会を前に、町長・団長督励が行われ、訓練の成果を披露しました。
その１部を写真で紹介します。（写真の順番は操法の流れとは一致していません）

1_ホースを延ばして水を飛ばし、火点（標的）に当てるまでの早さが得点につながる　2_素早く吸管を水利に運ぶ　3_指揮者の号令で定位置に付く　4_放水を終了。排水する作業も息を合わす　5_ホースを抱えて火点に向けて全力で走る　6 _自ら放水しながら、筒先の交替を指示する指揮者

消防署員さんに消防操法について聞きました　Interview

訓練でできないことは現場では絶対にできない
操法訓練で得た技術と仲間との信頼関係は一生の宝物

内子消防署
髙本　金充（かねみつ）さん

消防操法は、火災の消火を想定した操作を習得するもので基本的な動きを安全・確実にするための訓練です。消防署員も入署したときには操法の訓練をします。

操法大会では速さや正確さを競います。訓練礼式のきれいさも評価の対象。選手の動きがあっているか、ホースが真っ直ぐ伸びているか、操作を始めてからどれくらいの早さで水がでるか――。そんなところを見たら、操法を初めて見る人も楽しめると思います。スポーツと似ていますが、基本は訓練です。勝ち負けよりも過程が大切。目標に向かって団員が団結することで信頼関係が生まれ、後の活動や人生の大切な宝になると思います。

訓練の大切さは署員も一緒です。訓練でできないことは現場でもできません。即時対応するため、手抜かりがないよう毎日の自己研鑽が欠かせません。選手の皆さん、地域住民の安心・安全を守るという熱い気持ちを、ぜひ操法訓練にぶつけてください。

内子町消防団
髙橋　賢次（けんじ）　団長

地域の期待に応える活動を継続し、地域にも団員にも愛される消防団に――

私が消防団活動で注力しているのは、後継者の育成です。災害は起こらないのが一番ですが、万が一に起こった場合、知識や経験が地域や団員自身と家族を守ります。そのために先輩の団員や被災した地域の団員が経験したことを、若い世代に伝えて育てることが大切です。

私が消防団に入団した当時、神南山で火災が起きました。先輩の団員から、大規模な山林火災の場合は、慌てず水や食料を準備してから現場に向かうことを教えてもらいました。学んだ「備えの大切さ」は、今も消防団活動で生かされています。

消防署員や団員同士の交流を図ることも大切です。互いに顔を合わせ、語る時間を持つことは消防団活動を円滑にするためのいい機会になります。団員の性格などを知ることは、災害現場で的確な役割や指示を与えることに役立つのです。ただし団員は自分たちの地域を自分たちの手で守るという自覚を持ち、会社や家庭の理解を得るために、地域の期待に応えられる活動をしなければなりません。活動を通じて仲間や理解者が増え、自分の人生や仕事にも生きてくる――　それを誇りに思える団員が増えることが私の願いです。

団員は本当に大変です。仕事をしながら、家庭も地域も守らなければならない――。若い世代の人たちの入団数を増やすためには、組織の改革も必要です。少しでも団員が活動しやすくなるように検討委員会を立ち上げました。団員の話を聞き、課題を一つ一つクリアしながら、地域にも団員にも必要とされる消防団を目指します。

内子町消防団、新体制で始動

28年４月に消防団幹部の改選が行われ、高橋賢次さんが内子町消防団団長に再任しました。高橋団長をはじめとする消防団員795人は、火災などの災害が起きたときに災害活動を行うなど、町民の皆さんの安心、安全を守っています。皆さんから信頼される消防団として、団員が一致団結して使命に力を尽くします。

副団長
篠崎耕太郎（こうたろう）

副団長
古田　元昌（もとまさ）

五十崎方面隊長
谷岡　和彦（かずひこ）

五十崎副方面隊長
稲月　伸次（しんじ）

内子方面隊長
篠﨑　弥継（やつぐ）

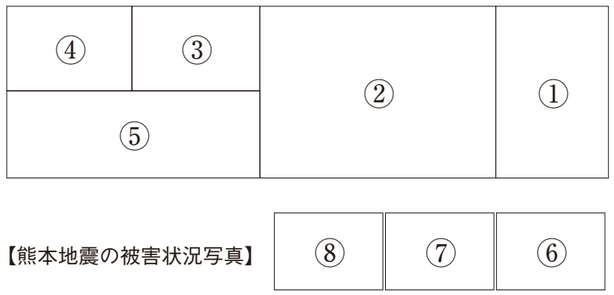
内子副方面隊長
井上　誠一（せいいち）

小田方面隊長
永田　秀明（ひであき）

小田副方面隊長
西口　邦彦（くにひこ）

深夜１時、震度７

― そのとき、自分を守ることができますか ―



【熊本地震の被害状況写真】

①②_熊本地震に襲われ、多くの家屋が倒壊した　③_１階部分が完全につぶれた家屋　④_石垣が崩れて道をふさぐ。地震後は周辺の状況が一変する（菊池市提供）　⑤_16日の本震で役場に避難してきた住民。菊陽町では約8,000人が避難した　⑥⑦_地割れや土砂災害など、家屋以外にも大きな傷跡が残る（菊池市提供）　⑧_益城町役場の入口。「立入禁止」になっている

「平成28年熊本地震」

4月14日午後9時26分ごろ、マグニチュード6・5の巨大地震が熊本地方を襲いました。益城町では最大震度7を観測。16日午前1時25分、再びマグニチュード7・3、震度7の地震が発生する非常事態となりました。

熊本では5月6日までに、震度6弱以上を観測した地震は7回発生しました。気象庁は5月19日、震度1以上の地震回数が1500回に達したと発表。以後1ヵ月程度は熊本と阿蘇で最大震度6弱、大分で5強程度の余震が起こる可能性があると注意を呼び掛けています。

震度7の益城町を取材

最大震度7の地震に2度襲われた益城町は役場も被災。正面玄関などが危険なため、1ヵ月が経過した5月26日も住民を庁舎内に入れていませんでした。職員の話によると「住民に必要な業務は公民館を間借りして行っている。庁舎の給排水は一部が復旧しただけで、電気も仮復旧の状態。職員の多くが家を失い、避難所から通って仕事をしている」とのこと。

半壊した家で片づけをしていた女性は「1回目の地震は突然、ドーンという轟（ごう）音と同時に下から突き上げられた。その後、上下左右にぐるぐると揺れて恐ろしかった。夜中に娘が迎えに来て避難したので、2回目の地震は免れた」と振り返ります。

一連の地震で、熊本県では49人が犠牲になり、4569棟が全壊しました（5月18日現在）。

南海トラフ地震も地震７

南海トラフ地震が発生した場合、愛媛県の最大震度は熊本地震と同じ震度7。内子町では1333棟が全壊すると予測されています。ガスや電気、水などのライフラインや道路が寸断されたら、それが真夜中だったら――。そのとき、あなたは自分や家族を守ることができますか。尊い命を守るため、今できることを考えてみましょう。

自助・共助、住宅の耐震改修の大切さは『広報うちこ』27年4月号の特集に掲載しています。合わせて読んでみてください。

地域を守る、思いは同じ

熊本地震が発生した直後、地域を守る職員や消防団はどんな活動をしたのか
災害現場で対応した職員２人に話を聞きました。
平常時にしなければいけないこと、災害時にできること――。一緒に考えましょう。

地域のために

熊本県内の各消防団は、震災直後から安否確認や避難誘導を開始。本震の翌日の17日には、熊本県内で約９２００人の消防団員が地域を守るために、幅広い活動を展開しました。

本震で最大震度７を記録した西原村では、多くの建物が被災したため、救助機関などの到着を待つことなく消防団が救助を開始。倒壊家屋から７人の住民を救助し、奇跡の村として報道されています。

そのつながりが防災力

消防団員を突き動かすのは「地域を守りたい」という思い――。つながりの強さが消防団と地域の力になりました。

つながりは助け合いの気持ちを育て、多くの情報が共有できます。そして日頃の備えで自分を守ることが、地域や消防団の助けになることに気付きます。消防団の活動を知り、地域とつながることで災害に強い地域防災を始めましょう。

1_給水活動をする消防団（菊池市提供）　2_消防団のＴシャツを着て活動する菊陽町の職員　3_避難者に毛布を配る消防団員（菊陽町提供）4_地震発生から１カ月経った西原村。仮設住宅が建設されていた　5_避難者用のテントは、災害ボランティアが利用するテントになっていた。受け入れ側も用地などの準備が必要

大地震発生。菊池市の住民を救ったのはやはり、消防団員をはじめとした「菊池市民」だった――

14日の地震も揺れましたが、16日の本震は本当に怖かったですね。死が脳裏をよぎるような大きな揺れでした。

発生後すぐに、家族に避難所の確認と食料・水の確保を指示して、市役所に向かいました。時間は深夜２時。停電で信号も止まり、町中が真っ暗。大勢の人たちが家から逃げ出していて、別世界のようでした――。

市役所に着くと、すでに避難してきた人でいっぱい。防災マニュアルに沿って即時対応します。私は広報班なので、情報班と連携して情報を収集。マスコミ対応やＳＮＳなどを使っての情報発信に当たりました。菊池市では普段からＳＮＳを使って生活情報や話題性のある情報などを発信していたので、これが災害時に役立ちました。

菊池市消防団の活躍は素晴らしかったです。日頃から熱心に活動しているので、初動が早かった――。地震発生後、すぐに各分団の団員が避難誘導を始めて、介助が必要なお年寄りなどを安全に避難させました。断水地区が広がり、給水活動が長引きましたが、消防団がサポートしてくれました。空き巣狙いを警戒して、夜間パトロールも継続しています。地域のつながりも強く、災害が起きたらすぐに住民同士の助け合いが始まりました。自分のことを後回しにして、人の支えになりたいと思っている人ばかりで、誇りに思います。

消防団は災害になると、誰よりも早く活動する究極のボランティア。そのすごさを継続するためには、若い人たちの理解が得られるよう、組織が柔軟に変わる必要があります。熊本地震を機に原点に立ち返り、「なぜ消防団が必要なのか」「なぜ地域のつながりが大切なのか」を多くの人に考えてほしいです。

今回の震災では内子町をはじめ、全国からたくさんの支援をいただき感謝しています。これから少しずつ復興に向けて歩んでいきますが、まちが復興しても被災して頑張っている「人」がいることを、ずっと忘れずに心に留めておいてほしいです。この地震が皆さんの記憶からなくならず、被災地の人の心に寄り添っていただければ、きっと皆さんの防災意識の向上にもつながるし、それが復興の力になると思います。

熊本県・菊池市役所政策企画部
市長公室広報交流係　野中英樹（ひでき）さん

Interview　　菊陽町消防団機動隊として活動

熊本県・菊陽町総務部
総合政策課企画政策係
酒巻　知弘（ともひろ）さん

災害時に応じた適切な行動の難しさ
日頃からの準備と訓練に工夫が必要

私は菊陽町消防団機動隊に所属しています。機動隊は役場職員で構成する消防団で、地震直後には避難所の設営や水・食料の運搬などの任務に当たりました。

14日、菊陽町では震度５強を観測。その日の内に、1,400人を越える町民が避難しました。そして翌日の深夜に本震が発生。混乱状態が続く中、３日間睡眠なしで活動を続けました。

実際に災害が起こると、防災訓練のようにはいきません。深夜の地震は、停電で真っ暗。どんな状況下でも即時対応できるよう、職員全員が備品の使い方、置き場所を定期的に確認する必要があります。指示系統が混乱し、住民に給水時間を伝えることでさえ時間がかかるのです。常に万全の体制で行う防災訓練ではなく、失敗をさせる訓練の重要性を実感しました。